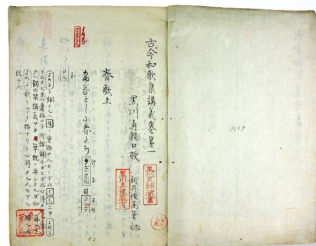


## 黒川真頼『古今和歌集講義』



本学特殊文庫の中心をなす黒川文庫は、江戸時代末から明治時代にかけて国学者の家である黒川家三代——春村・真頼・真道——の旧蔵書である。春村(1799～1866)と真頼(1829～1906)によって蒐集された黒川家の蔵書は、真頼の嫡子真道(1866～1925)が継いだ。関東大震災後と第二次世界大戦後に古書店に渡り、分散した。本学の黒川文庫は、黒川家に蓄積された学問や知の中核となる和歌・物語・歳時の部を有し、黒川家はもとより、近世から近代にかけての国学・国文学の具体相をも浮かび上がらせる貴重な古典籍コレクションである。

『古今和歌集講義』は黒川家の2代目真頼による『古今和歌集』の講義書で、真頼が口授した内容を新井俊高・孝俊が筆記したもの。函架番号B5。写本、明治時代の書写か。3冊。縦26.8cm×横18.6cm。格紙。浅葱色・布目の紙表紙。外題・内題「古今和歌集講義」。第1冊は50丁、2冊は56丁、3冊は53.5丁。1面7行。1首2行書き。蔵書印は、「黒川真頼蔵書」(角印)「黒川真頼」(丸印)「黒川真道蔵書」(角印)。第1冊は春上・春下・夏、第2冊は秋上・秋下・冬・賀、第3冊は離別・羈旅・物名・恋歌一を収める。第1冊の春下までは新

井俊高、それ以降は新井孝俊の筆記(筆跡が異なる)。

本資料は、和歌の本行本文の位置に片仮名・四角囲みで解釈を記し、その右に平仮名で和歌本文を傍記するという表記方法を取り、和歌の左に語注を記す。語注は、和歌本文を平仮名・小判型の丸囲みで示し、助動詞は丸囲み・助詞は四角囲みにするなど、表記上の工夫が窺える。また、語注には、先行注釈書として本居宣長の『古今集遠鏡』が引用される(漢字片仮名表記)。真頼の師・養父であった春村は本居宣長の著書に学ぶことが多く、本学黒川文庫蔵の『古今集遠鏡』(B72)には真頼による朱の書き入れが残る。そのような真頼の学問環境の一端を窺うことができるのも、本資料の特徴である。

なお、真頼は上野国桐生町(現群馬県桐生市)の金子家に生まれ、13歳で江戸の国学者であった黒川春村に師事、38歳の折、春村の遺言によって黒川家の後継者となった。明治維新の後は文部省・内務省などに籍を置き、博物局博物館(東京国立博物館の前身)の創設時期に尽力、また東京帝国大学・東京美術学校(東京芸術大学の前身)等で教鞭を取るなど学界・美術界に幅広く貢献した人物である。

(日本語日本文学科 准教授 木下華子)